還相廻向の体験

調　円　理

教の巻の巻頭に、「謹んで浄土真宗を按ずるに二種の廻向あり。一つには往相、二つには還相なり」とある。そうして「若しは往、若しは還、一事として清浄願心の廻向成就し給うことにあらずということなし」と。真実信心は往相還相の他力廻向によるものであるということが浄土真宗の教義の根本であって、本典は聖人のこの体験を明かにせられたものである。

往相とは現実の此岸の世界から、彼岸の浄土に往生することであり、還相は彼岸の浄土から此岸の現実の世界に還来することである。ここで先ず問題となるのは、此岸と彼岸との関係であろう。往生を此岸のこの土に死して彼岸の浄土に生れることであると表現するならば、彼岸の浄土は此岸のこの土から離れた別の世界であるように思われる。

しかしながら此岸は相対界であるが彼岸は絶対界である。相対は絶対に帰趣することによって存在することが可能となり、絶対は相対を包摂するものである。それでこの二つの世界は並列的でなく、帰趣と包摂との関係にある。

凡夫は我愛我執の存在であるから相対者である。それで凡夫に自覚するとき、絶対者である如来の久遠の呼び声に自ら帰趣する。これが南無と帰命する一念であって、その刹那に阿弥陀仏に摂取される。この時往生は定まるのである。それで往生は未来でなく、過去と未来を含む所の永遠の現在である。即ち未来往生でなく即得往生である。

さて往生の実質はいかなるものであろうか。往生は成仏の道路である。往相は願生心であるが、願生心は願作仏心である。そうして願作仏心は度衆生心である。往相は願作仏心であり、還相は度衆心である。「願作仏の心はこれ度衆生のこころなり度衆生の心はこれ利他真実の信心なり」。即ち他力廻向の信心は表は往相であるが、それは還相にうらづけられた往相である。還相を内含しない往相は、此岸の苦を逃れて浄土往生を願うものであって、それは大乗でなくて小乗である。度衆生心によりて願作仏心は常に反省せしめられる。還相の裏付けによりて往相の信心は純化せられるのである。

往相は還相によりて意義づけられる。往相に内含されている還相の徳は教人信として顕れる。自信と教人信とは不離の関係にある。自信は聞法によりて深められ、教人信は説法によりて実践される。即ち聞法は説法を内含しているが、真実の説法は聞法を帰趣としなければならない。そうしてまた説法によりて、聞法はいよいよ切実となる。

如来は浄土に安住すると同時に、煩悩の世界に還来して、苦悩の衆生に同悲同感し、その救済にひまがないのである。信は如来の還相の体験である。

往相によりて浄土に生れた菩薩の活動の舞台は娑婆世界である。

われわれが信を得る機縁となるのは善知識に会うことである。故に善知識は還相の菩薩として体験される。逆悪をおかした阿闍世も調達も、家庭の大悲劇に悲泣雨涙した韋提希も、これら実業の凡夫が、信体験の上から、親鸞聖人には「逆悪もらさぬ誓願に、方便引入」した還相の菩薩と拝まれたのである。われわれが深難信の法に遇うことを得たのは、われをとりまく人々の縁によるのである。これらの人々は皆還相の菩薩として拝せられるのである。この体験の表現が、人々に対する心からの合掌となるのである。

真宗教相の原意について

——真宗の教相と根本仏教の教義について——

西尾京雄

一

親鸞聖人の教学が仏教思想の正統であると考えるものとして、根本仏教におけるどの教説に根拠をおくものであるかを究めなくてはならない。とくに、浄土教の経典などは、印度本土のものでないという考え方さえ横行している時でもあるのであるから。

二

それについて、解深密経が般若経と華厳経とによって構成せられているが如く、大無量寿経は涅槃経と華厳経との成立の上にあるといわれている。思うに、涅槃経は仏陀の大涅槃の境地を常・楽・我・浄と説くのであるが、それは、根本仏教の教説において、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の四衆の人々がともどもに覚証することを説く四念住説である身・受・心・法について、無常・苦・無我・不浄と体験するところに顕現される相でもある。華厳経は仏陀の一念の覚証の境地を説く。大無量寿経は十方の衆生であるわれ等が身証せられる念仏体験の相を説いている。而して、その体験の相は成就文に示されているので、それは、身・受・心・法の四念住の四相として領受することができる。

即ち、

一、聞……身念住
二、其名号……受念住
三、信心歓喜……心念住
四、即得往生
　住不退転……法念住

それで、親鸞聖人の教行信証の四法の教相は念仏の身・受・心・法に領受せられた相であると思うのである。

三

四念住から念仏の移行についていう前に、仏教の根本思想として四法印をいう。それは、無常印、皆苦印、無我印、寂滅印であるが、それは、四念住説を要約すると思われる。

諸行無常　Aniccā vata saṃkhārā
是生滅法　uppāda-vaya-dhammino,
生滅々已　uppajjitvā nirujhanti,
寂滅為楽　tesaṃ vūpasamo sukho'ti.